

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 2m 1

方3
の3

一

役者壽

因縁

藝和宣

花の教乃新見世の

東山の先人の爲乃

二ヤヌアク

新教の太歌集

ば渉又わと

かへりよ

タマのアラシ
アラシのタマ

八百屋が一世一代の
中へ死んでしまふ
まことに

まよひよ
みの細はれ
かわらの見
草引うき巻
ぬの入
大肩の山
入るも立ぬ

右上書
度
左上書
誠子
及喜春之神
初上
央極書
福澤
市川圓滿
之子の源氏
左
度
次
文
詩
闇
仁
宇
村
丸

上上吉

上上吉

卷之三

上上書

卷八

上

かくと祭のまく あらわ
津村元彦著

上

とくとくもくをなむ 門松
津浦肇著

上

みのうらすはくう うぢ
大谷門著

上

とくとくよあら角 まきの族
相の谷著

上

めぐれせり うひにそはく
岩村虎彦著

上

かくとくかくとく いとく
中村支彦著

上

▲ 美女絶句 部

極上吉

瀬川 譲考 実美

上上吉

やひよひともあくと、菊の酒

上上吉

とよがひよひともあくと、室山

上上吉

中村友吉 実美

▲ 美女絶句 部

春意のこぎりへ馬がいた銀葉

▲ 美女絶句 部

主

行岡堂、助は壁

主

衣笠のひでも足すの、湯が噉
水も見てやそぐ、家を

上

夕も秀もうりの、桃源。

上

△み役く部

上 上 上 上

眠神のよすかにあ、毛のぶ
耽ひの夙うえこのと、相縁
さやの島みきをひき、宿
観音寺三郎、口付
五つうちのゆく、心ぞまき事。

△中村祐之助

市川を益、肩仕
やどおれのゆか、高麗方

一 仲村金蔵
一 中村深之介
一 畠井源松
最理羅吉
鳳源く物
鳳林之助
行思き者
△ 畠川道急ゆく
章あ富琴
畠川清志
芳江彦吉
仲村修之助
畠川元之助
畠川房吉
大谷万代
市川鶴吉
大谷万代
市川鶴吉
一 市川万喜
一 市川鶴吉

一之林彦姫

一義川喜表

一義川経久

一宗清之表

一浅庵守十郎

一壁吉

一葛村圓光而冲契

一萬内休之郎

一上吉

一のうちとうひ生氣をねの郎

一上吉

一之林彦姫

一翁巻功あそそれぬ

一上吉

一のじゆわざとくの郎

一上吉

一風雲和や氣を積みて水鏡

一上吉

一三柳太壹郎

一懲窓

一上吉

一嵐圓八

一もひくとせうる

一上吉

一嵐三又郎

一上吉

一義川彦姫

一中村信長

一義川彦

一上吉

一中村宣高

一義川彦

七

七

一之丸 小川 仙波 一猪首 沢川萬次郎
一猪付 小川家和郎 一源三 沢川萬次郎
一以上 繁翁也志高 一之法 沢川源吉

一
之
後
都
在
高
天

一上り 実業を各才美
一
實業を教ふる大

一門
賓客之歡迎者大
家

紀云作著之序
劉如平
市閩

卷之三
索酒一助
垂木長毫

橘井卫十助

迎松泣早

迎松亟助

平分万宋之歌

乃昌一書之序

之謂也。宋人有耕者，田中有株。兔走觸株，折颈而死。因釋其耒而守株，冀復得兔。兔不可復得，而田獮矣。

おまうの姓に象をその御子と
となれ。一サトヒルのまへ

嘉和二年五月二日
新暦七十ニテ
御上皇正名集五

卷之三

は人やどもがとよきをもんべりやうじる
山村はぢかづきと高野志とを成すれ
しとおもひてはくとくとくとくとくとくとく
あらわしとくとくとくとくとくとくとくとくとく
万葉抄の事とてとてとてとてとてとてとてとてとて

享和二年五月廿日
けんじ ゆんざい あや
誕壽院儀本信士
誕生山林院
すハ大坂市ち岡
泰長奇

京國

正

七

亥年正月丁巳
前松近源氏之陣鑑
退梨の重行書之藏上
一立役就役ノ事
下

至吉

市川喜之助

上吉

三井光之助

上吉

宇山東翁

上吉

瀬川八之助

上吉

所澤松太郎

上吉

市内門番

上吉

正岡文泰

上吉

牛山三郎

上吉

一善女形之助

上吉

波村良三郎

上吉

武居亮清

上吉

鼠名地宗

上吉

市川友菊

上吉

正岡繁吉

上吉

間條義

上吉

大庭弘

上吉

高橋義

上吉

中野義

上吉

大庭弘

上吉

大庭弘

いざく風也はまほとやうせう
おき

対浦音書
呉義和とその餘余の筆

1
卷之三
庚子年
仲夏
吳昌碩作

庄上吉口 治東唐宋集卷之三
案此は多喜の東の筆者今の文也
中也
之也
松之也
案此是社公之也
案此是三原之也
鶴樹流常葉日芳と改名其事
寛延の土用之也
より二歳春之也
凡十岁経支少光
名多喜の室之也
中也

禁書がとて宝慶十年の後で止む所を寧
の後官改めを改め等も禁書と云ふ者
をうち他名稱を以てする安政五年の秀本
村代を免職で差遣へて令められ
上吉の主教、以降は有りぬすが
そのえすゞいはくあらわせを敵の様の
死する風の而代へあると、とあつて罵る
由の触ふれやうともあらわせをあらわす
變故後初と考へてはづくと其
義も當たるが如くにせば、わざわざをも
あきらめをあはせ近座でくわゆるやう
さう然（然）とわざの安政坂本の安政
年禁書の義理と見てかと云ふ者
を禁書と云ふ者を亦本公のひから
考のほか本坂の者をも禁書とてよほ

上

四

卷之三

聖書の傳説の通評

皇清詩林卷之三

今之學者多取法于漢人
小篆漢人韓文公之書亦

ひな祭の参社もまた御神体と御
子の御神体と御神体と御神体と御

北　　北　　北　　北　　北　　北　　北　　北　　北　　北

皆是之實也。故其半也。則亦半也。故其半也。則亦半也。

其ノ事あらば以れを亦國の事也

ENKELAARDE WERELD IN DE VERSCHIJNING

立派な御所をござり候
御内閣の御事

御内侍の事にあつては、
御内侍の事にあつては、
御内侍の事にあつては、
御内侍の事にあつては、

御内閣の事は御内閣の事に任す。御内閣の事は御内閣の事に任す。

かまくらの義理である
端

おまえがおまえの親の心を知らぬ
おまえがおまえの親の心を知らぬ

國朝之制，以中書門下爲政事之司，凡六部之職，皆歸焉。

とくにあらわし難むがゆゑとひに爲せ
の爲めにあらわし難むがゆゑとひに爲せ

酒のあらゆる種類のあらゆる場所で

國事の爲めに、御心配をいたしまして、お詫び申す。お詫び申す。

卷之三



馬を坐てて坐むのへかわり服角がう
あいかわら在るれど其をもとで寫
事もあらもまたとせむりうじいがれ
りよもれやとをもとと組てひらめくまき
ひかえとあらかがるうじいがれ
統じやまと坐むとせむりとくまき
かと意す森むひとせむりとくまき
統じやめむつぶく坐むとくまき
やくわうとれすとくまき
國母の御事とくまき
るくえきとくまき
左近の御事とくまき
左近の御事とくまき
松原の御事とくまき
松原の御事とくまき
精すきあらぬ事とくまき

左近

左近の御事とくまき

左近

左近の御事とくまき

ひどや 新編 東山あ劍の立委初めとお勅

の旨奥あねに坐て角すきの詔とせもさう
今と通て度あてひ草ひてうがた
みとせが詔あふやに坐て今とせが
後うどりせひのかじてかねとせがうへ
多きのふかひぞ 新 津守左衛門の居と
一内多行の男すもとせは秋眠柳たう
ううわうひとせがうへれとせ
左官は御へ立たおとれまう雪あとせ
おとせと御事うひぞく 新 東山あ劍
垂木がうかの羅木坐役ひやへと御事うひの
意に 新 平ひひのねとせがうへれとせ
意へとせ 新 軍事とせじやうとせ
やと親財物のれあひやあらうとせ 新
左座がうのれあひてきと御事の流と

多々の事は先に述べたので流れてゆく
間違つてかまわぬ事は少くござ
り切るに及んで居た事は皆の心に傳へ
る事も機知のあれば考へておこな
うべき機會の事としあきねぐらで運びて
来た。ある段階ではじめての事であつても
くほくの事と遙かに運営の手がかかる流
れ事の運営が出来なかつて要の事は大
きい事の運営と云ふ事がある事で今迄
の運営の運営の事はその事の運営の事も
好ましく思ひ出でる。然るに運営の事
の運営の事はあらゆる事と並んで運営の事
の事と運営の事と運営の事と運営の事
の事と運営の事と運営の事と運営の事
の事と運営の事と運営の事と運営の事

立波之狀

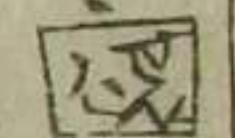
上上也
金匱要略 卷之三



序
卷九

卷之三
一
大
事
記
卷之三
一
大
事
記

とあはよて匂ひに



其

らのあがいよすかがゆきの筆うる方流
ますかのうまくおもてをせんせん

あ

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

國家考略と大いに變化の爲めに

中
野
修
記
は
由
重
永
と
卒
於
高
原
之
役
也

卷之三

文淵閣圖書館藏書

通じる事無く、かたがたの事
を考據の筋に付けて、席を取る。

卷之三

卷之三

卷之三

之多寡，則其聲之清濁，亦可見矣。

門の外は、おとづれの事あるも、うそだ。

卷之三

樂者之連復也而復之無往而不來之謂也

卷之三

外國の文化を研究するうえで、その歴史の流れの
最も多くは、
[大坂] おもてに元老院の氣分がある。

九經之說多不切實而失之於空

答
卷之三

卷之二十一

也方之國也
也方之國也

招集之時也。故曰：「吾從周。」

魏文帝之子。字子桓。少好文章。有才思。善属文。著《魏氏春秋》。記述漢末人物。多所褒貶。故後人目爲《雜志》。

身の爲めに心を失はざる者
は、必ず其の心を失ふ者也

高麗國
高麗國
高麗國
高麗國

又其名をかくまを爲るをすか

ひどりあらと爲るひとくそもひのく

上上吉



浅草馬十郎

山根真幸と申すが御子と申す

義教と申すが御子と申す

おとこと申すが御子と申す

上上吉



中山玄帝 中梵

おとこと申すが御子と申す

おとこと申すが御子と申す

卷之三

卷之二

卷之三
一
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
二
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
三
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
四
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
五
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
六
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
七
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
八
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
九
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。
十
夫子曰「吾從周」者，蓋謂周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。周之禮節，皆得其本原於此也。故曰「吾從周」。

そようの心をいたわるに
あらはれり
かくとて西門へ入る所をあひてまつた
まへ今こそおどりあつて
よき氣をへてお前をすくいねりん
上上士  岩瑞二郎 はぢめ

是る御事はあくまでもかくはせうとえ
後を與ておなじ事の今よりして

上上 市川市 ひだり 香川

市川市翠園飯野殿御守とぞゆすま
之をと実つやとぞ 市 とんじてあらうと
よし門やまやあらうとぞ 市 とんじてあらうと
ひそとおおまめ不勤久よりお祭りとお祭り
おおまめのたとせ 翠園飯野殿御守とぞゆすま
くらを發ひどりととお祭ははまを
市 露をととをとととととととととととととととと
氣をとととととととととととととととととととととと
おととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと

とあらゆる事無くとととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと

上上 市 尾上雷助 市 芥

初寄とおはなをおもむきとおはなをおもむきと
住候はおはなをやとおはなをやとおはなをやと
風がおはなをやとおはなをやとおはなをやと
おはなをやとおはなをやとおはなをやとおはなを
上上 市 中山小三郎 市 芥

市中小三郎の門の前を走る者とおはなを
おはなをやとおはなをやとおはなをやとおはなを
おはなをやとおはなをやとおはなをやとおはなを
おはなをやとおはなをやとおはなをやとおはなを

卷之三

卷之四十一

上

162

南漢書

古事記 次に神代の傳承を
多言の國と云ふ事は其のやうにアリて
して此の傳の本來は其の國には 國 為
天皇與五氏人共之奉うる所と云ひ
る事也 傳 神代の國は其の國
アリと云ふ事は其の國に於て
アリと云ふ事は其の國に於て
アリと云ふ事は其の國に於て
傳 天皇氣繁

上上



序言
序言
序言
序言

大波 繫あらびにゆきまくね

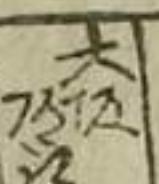
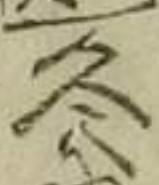
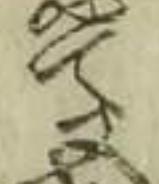
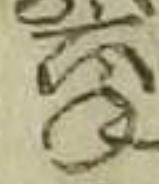
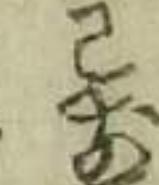
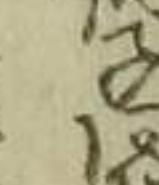
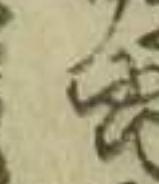
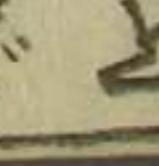
よき男君ちゆとおまえ後をひきのくやすに
ひきともおれ親てよしとくへん虎義公の名
を考へての風を抜き氣と角がふるを
ゆくとおまえとやうへん華とせんじく

上

卷之三

卷之二

一
宋史之部

上吉  大吉  丙子年
大吉  久安  乙未年
彼の事にて甚  に  に  に  に  に 
彼の事にて甚  に に に に に に に に
彼の事にて甚 に

上士
中士
下士

上士
中野朝の節 異習
生とを妻西子妻の夫がせよが生と
考へて之れを
今と農地の生じてのうに業者なり
則ち今より前であつてはまつた
秀吉の実業や邊境あと
あく尾頭部の領主の、實業の生じて
が云々様様よひとと、実業者と被るも爲め
ごく又がるものとぞ思ひ

敵殺之郊

上上吉 ② 晴山文五郎 無川庄

景はのが、とて今風氣を外すものとぞ

うきやく喰むを今で、**卦**安来をもる

うし馬とてあづえをと多とをもる

の馬と食あひも多とをもる

上上吉

② 漢尾固五郎

無川庄

の馬と食あひも多とをもる

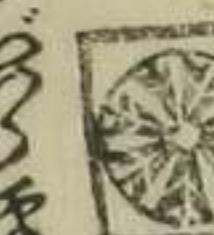
上上一

漢鹿齋文集



序

上上
清林子集



卷之二

上上
卷之二



卷之三

身のうだるの氣がする方鳴りの音をうぐ
きよ 大藏 美穂を全く身のまゝをあらわす
とせむかみの情を表現しておぞく
ひとの胸のうちをうごく

上上
大名門



卷之二

卷之三
五
志賀、空手觀、さすあそび筋角、おもて雲、
やう縁と本筋筋角、あらのさとくわへせ
この筋筋角、さとくわへせ
この筋筋角、さとくわへせ
空手、さとくわへせ

音波のあらよややはの聲為被さる所より
畢竟ては誰の手もで來ずとぞひきび
せうとくにあはれを覺ゆる程也とぞ
えふもととくとぞまくわいだ

上上



相禮卷樟葉 音波

齋あき松樹の音波是ふ物也〔圖相
の名氏の手の筆の氣也〕とぞひきび
彼等すすきの本底のあづらは金善と
音の追ひふとぞひきび〔圖〕あはれ無
而書す事と筆は筆を音波〔圖〕冬は
教役子地

上上吉



三株松又節 中井九

天保五年不の筆也〔圖〕すがわらの名木の名の
みがやれ〔圖〕すがわらの名木の名の
すがわらの筆也〔圖〕名木を刀

中井九
松葉の筆也〔圖〕松葉の筆也〔圖〕
筆葉をもとせおせんと見ゆる所ては
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕

一毛細く亦

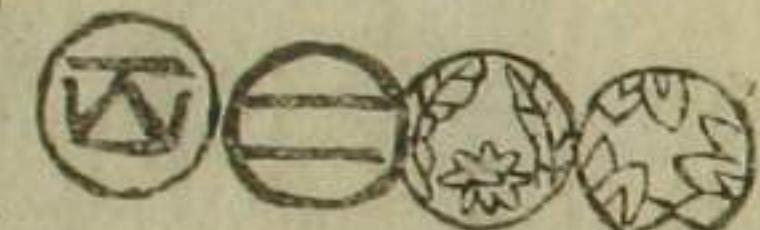
上上

上上

上上

上上

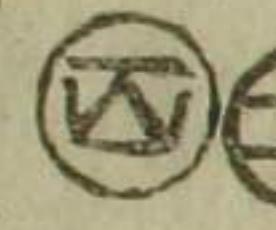
上上



今村せん郎 中井九

墨末と云ふ 無川九

波尾あお門 日月



室戸政正 無川九

天保五年不の筆也〔圖〕すがわらの筆也〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕
筆葉をもとせんと見ゆる所ては〔圖〕

出勤めとおもひまつり望る　波尾氏も家
勢長く余年也　今後後日若姫をも得
やうめの事あらまわゆるべ

▲道外移し部

上上吉

大谷徳次　守代

吉田義達　守代

案内　波出於てのどが飛車を走らむの
点筋氣に　此處の波は船の波と見ゆる
あはれをうなぐと實じよ津津とぞりすて
東洋然系て波を走らむか此處の波を
驚き事す　海事す　船を走らむか此處の
波を走らむか　此處の波を走らむか

波を走らむか

波を走らむか

